HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	まえがき
Citation	高等教育ジャーナル, 3, 1-3
Issue Date	1998
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29807
Type	editorial
File Information	3_P1-3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

まえがき

わたしたちは，1997年９月25日から27日の３日間，「これからの大学教育と教育評価」と題して，高等教育に関する国際ワークショップを開催した。主催は，北海道大学高等教育機能開発総合センターの高等教育開発研究部であった。この雑誌は，国際ワークショップの講演論文の大部分を印刷したものである。英語の論文については，日本の読者の理解を助けるために，研究部の教官が手分けして日本語に全訳した。全体を通してみると，今日，世界中で進行している大学改革の現状と方向を理解できる。

今日，日本の大学では，戦後最大の教育改革が進行している。このワークショップの副題は，「日本の大学はどこへ？」とした。また，最終日の市民公開セッションは「総合大学に芸術を」という副題をつけた。大学院重点化などで，研究大学的要素が強くなっている日本の大学で，一般教育の位置付け，社会との連携をみようというものであった。

ワークショップの会場は，200席あまりの医学部臨床大講堂であった。この講堂は，大学の中で最も新しい劇場型の階段教室であり，モダンな視聴覚設備を完備している。大学の講義のモダンな形はどんなものだろう。外国の講演者から学べないだろうか。この会場に，250人ほどの参加があり，常時，ほぼ満席の状態であった。参加者のうち，約150名は九州，鳥取などの遠隔地を含む大学関係者で，うち50名は北海道大学関係者であった。参加者のなかには，学長，副学長，学部長のような方々の約20名が含まれ，大学レベルでの関心の高さがうかがわれた。また，約70名の一般市民の参加もあった。講演者以外の海外からの参加者もあった。とりわけ，韓国霊山圓仏教大学からは，総長はじめ７名の参加があった。

講演者には，国内的，国際的に目覚ましい活躍をしている方々を招くことができた。国別にみると，アメリカ，イギリス，オーストラリア，ロシア，韓国からの10名と日本人の11名であった。海外のみならず日本の学者を同数いれたことは，日本の現状を国際的視点で比較でき，有意義であった。

このワークショップは，高等教育機能開発総合センターの高等教育開発研究部の２年間の活動から生まれた。このセンターは，全国でもユニークな形をとっている。教養部廃止で平成７年度に発足したセンターは，全学教育のカリキュラムを担当する委員会組織の「全学教育部」，大学全体の教育の在り方，入試から大学院教育まで実践研究する「高等教育開発研究部」，大学と社会との教育連携を研究する「生涯学習計画研究部」からなり，ふたつの研究部は専任教官組織をもっている。生涯学習は高等教育の一環であり，大学教育は生涯学習の一部でもある。両研究部は互いに連携して，入学試験，一般教育から大学院教育，社会人教育を具体的に研究し，大学全体の教育改革に機能することになる。

また，高等教育開発研究部には，外国人客員教授をおき，高等教育の具体的問題を世界のなかに位置付けて研究できる仕組みとなっている。今回のワークショップは，平成７年

度以来の海外との交流から構想された。講演者のなかのヘンリー・ロソフスキー教授は，ハーバード大学の学長を10年ほど勤め，著書「大学人マニュアル」は日本語をはじめ，数カ国語に訳され（「大学の未来」TBSブリタニカ），高等教育に関する種々の賞，日本の勲二等端宝賞等を受賞している。わたしたちの研究部の客員教授に予定されていたが，本国の都合ではたせなかった人物である。北海道大学の姉妹校であるポートランド州立大学のマイケル・リアドン教育担当副学長は，何度かわたくしたちの大学を訪れている。ポートランド州立大学は，社会と連携する教育改革の実施で米国で最近にわかに注目されている。姉妹校のマサチューセッツ大学からは，マルセレット・ウイリアム副総長，芸術センター副センター長のジョーン・ジェンキンス教授が参加し，講演された。この大学は，実学的研究，職業教育と教養教育の統合カリキュラムで長い伝統をもっている。マーク・テナント教授は，オーストラリアのシドニー工科大学の教育学部長であった。わたくしたちの研究部の最初の客員教授である。マイケル・バレッジ氏は，平成９年度の客員教授で，ロンドン大学経済学部の講師である。その他にも，ポートランド州立大学の日本語教師，渡辺素和子助教授，韓国からのパク・メンス教授，ロシア経済アカデミーのピヨトル・シャリモフ講師，私どもの大学のジョセフ・トメイ英語教師が講演した。

ワークショップの講演は，北海道大学の丹保憲仁総長の21世紀の大学像の大きなはなしから始まった。そして，それぞれの国の文化背景を反映した教育改革の内容が，日本の講演者の内容と比較されながら，紹介されていった。討論は，時には文化論となり，高揚しながら進行した。講演のすべてが，内容豊かで示唆に富む印象的なものだった。詳細は，本稿にゆずるとして，最後の二つだけ取り上げよう。最終日は，多くの市民の参加をえて，日本の国立総合大学では思いもよらない題名「総合大学に芸術を」で展開された。この題名は，丹保総長を少なからずまごつかせたようであるが，最後から２番目の原田康夫広島大学長が，日本の芸術教育の歴史と現状の紹介を行った。そして，そのあとの歌が素晴らしかった。実は，原田学長は，医学者として育ったが，現役のオペラ歌手でもある。聴衆の市民の一人から乞われて，「オーソレミヨ」を歌われた。講堂の壁が振動し，聴衆の心に響いた。最後の講演者，マサチューセッツ大学のジェンキンス教授は，音楽と舞踊講座に属し，一般教育のカリキュラム改革のリーダーをしている。研究大学であるからこそ，一般教育が重視されるべきだと述べたことが，とくに重点化の進行する北海道大学の現状，教員の意識に照らして印象的であった。ジェンキンス教授は，トランペット奏者でもある。講演は，ビデオ，音楽，スライドを駆使して歯切れよいリズムにのった見事なプレゼンテーションであった。そして，３日間のプログラムは，聴衆の心の高揚とともに終了した。

以上のような内容で，このような規模の高等教育に関わる国際ワークショップが日本で開催されるのははじめてのことである。今日，日本の大学が改革の波にもまれているにしては不思議である。少なくとも大学が主催するこのような形のワークショップははじめてである。終わってみて，このワークショップが実に内容豊かであったことにあらためて気付く。現在の日本で進行している大学改革が，実は世界的な問題だということに気付く。そしてまた，日本と世界との違いにも気付く。現実の高等教育を大きく動かし，改革を進展させていくためには現実の問題を解決する具体的な教育の研究が重要であることに気付く。

わたくしたちは, このワークショップを通じて，21 世紀の日本や世界を担う若者に対する大学の在り方と大学人としての責任を改めて認識するとともに, 日本の現状を世界に位置付けることができた。そして，大学改革の方向をより具体的に把握できた。このワークショップの成果は，ここに参加したそれぞれの現場で生かされることを信ずる。また，このワークショップの成果の１つでもあるこの雑誌も, 世界および日本の大学の進むための道標となることを期待する。

このワークショップは成功であった。実行委員は数か月の間，準備をし，各実行委員はそれぞれ結構な量の仕事をこなした。うれしいことに，ポスターやパンフレットのデザインはわたくしが担当できた。そして, 期待の成果をあげることができた。わたしたちは，このワークショップを成功に導いたひとりひとりの講演者，座長，聴衆，そして，実施を支援した事務職員，運営に参加した仲間，学生に深く感謝する。この仕事は，この雑誌に講演論文を印刷することで終わる。最後に，わたくしは，このワークショップを成功に導いた実施組織のメンバーを誇りをもって紹介する（実行委員のリストを参照，p. iii)。

高等教育に関する国際ワークショップ実行委員長
阿部　和厚